

世界中のすべての人々が傷つけ合うことなくみんな幸せに、子どもと自然がのびのびと

# 子どもと自然 学会通信

2012年7月24日発行 46 (vol.10 no.2)

*Society of the Child and Nature*

発行：子どもと自然学会＝日本学術会議協力学術研究団体

- 目次 「ゆびさし」は自然の中で最も多く行われるという(2)  
子どもと自然学会福島大会シンポジウム講演要旨(5)  
シンポジウムⅠ 放射能汚染と子どもたち(6)  
シンポジウムⅡ 放射能汚染と市民生活(10)  
活動報告と活動方針(14)  
なかの大会案内(18)

## 第18回研究大会「長野大会」

大会テーマ：「どうする理科離れ・自然離れ(仮)」

開催期日 2012年 11月24日(土)  
25日(日)

開催会場：信州大学(長野市)

1日目：一般発表/ポスターセッション/  
懇親会/第9回全国学生交流集会

2日目：フィールドワーク/シンポジウム/総合討論

## 「ゆびさし」は自然の中で最も多く行われるという

—子どもと自然学会第17回福島大会に参加して—

事務局長 生源寺 孝浩

2012年6月2日～3日 子どもと自然学会第17回福島大会で皆さんとお会いできてほんとうによかったと思いました。とてもすごい会でした。その内容の詳しいことは、感想文集でお知らせしていきます。感想文がまだの方は、是非、事務局まで大至急お寄せください。

★さくら保育園の齋藤美智子園長先生がシンポジウムの中で話してくださった言葉が忘れられません。それは「ゆびさし」という言葉です。少し懐かしい言葉でもありました。

■生源寺は、教育学部では障害児教育学科でした。その関係で、卒業後すぐは、恵光学園という岐阜市立の民生部厚生課管轄の施設の派遣教員として赴任しました。その施設に措置（㍻）されている（当時の厚生省の施設では入園することをこういいました）子どもたちは、私の顔を見て「アア、アー」とは言うものの、ほとんどの子どもが言葉を持っておらないという比較的重度の知的障害を持った子たちでした。

恵光学園には優れた指導者がいました。元中学の美術教師で知的障害のある子どもの教育を経験したことのある人でした。その人は神田美一さんといいました。その人を中心にして、恵光学園にいた職員たちは「障害児の発達」に関して学習をしました。

恵光学園は岐阜市内を一巡して子どもたちをバスに乗せて園舎まで連れてくるのです。スクールバスが市内を一巡してくるのに、約80分間の時間を要しました。子どもたちを乗せたバスが園につくまでの時間は、私たち職員は職員だけで過ごすことのできるあるまとまった時間でした。会議の時もありましたが、その約80分間ほどの時間は、主に学習

に当てられました。そのとき学習したものに『障害児の発達保障理論（試案）』というのがありました。当時、近江学園の研究部長だった田中昌人さん（のちに京都大学教育学部）の理論的労作でした。

■ある日、恵光学園に田中昌人さんをお招きして講演会がありました。ご講演の中で印象に残っている話に次のようなものがあります。

田中さんが勤務している近江学園に男の子が入所していました。その男の子は園舎の玄関先で、ある行動をとっていたというのです。その行動とは、長靴の片方を、もう片方の右にそろえて置き、それを見て、また左側にある長靴の片方を右側に置きました。それを見て、彼は、また左にある長靴の片方を、右に置くという行為を繰り返したというのです。そして、ついに、彼の今履こうとしていた長靴は、玄関の一番隅にまでいってしまったのでした。田中さんは注意深く長靴を見てみました。その長靴は、左足用と右足用の靴が一对になっている長靴ではなく、二つの靴が両足用ともに左足用の長靴が二つ並んでいるものだったのです。

ある発達のレベルにある子どもが、靴の右足用と左足用の靴を反対にして履いていることはよくあることです。小学校一年生の子どもでも、左右反対に（前ゴムの）運動靴を履

いていても何とも思わずにいることはよくある光景です。近江学園の、かの長靴の彼は、両足用共に左足用の靴を見て、どこかがおかしいとは思ったのです。でも、どちらかが右足用でどちらかが左足用のはずだと思っていたからこそ、加えて、しかし、両方ともが左足用であるという判断ができなかったからこそ、左右が逆に置かれた靴は片方を反対側に持ってくればよいとわかっていたからこそ、両方とも左足用の靴を反対側に持ってきては（持ってくるごとに）、これでは左右が逆であることは直っていない、完成していないと判断し、左側に置かれている片方を右側に持ってくるというその行為を繰り返さざるを得なかったのだと、田中昌人さんはいうのです。★私の心は揺さぶられました。子どものすることには必ずやわけがあるのだと思いました。どのようなわけがあつてそのことをしているのかわかり得ないときは、そのわけ今はわからないだけなのだ。それ以来、私は子どもの行為（すること、言うこと、書くこと、そして表情）を、それらが積極的な行為でない場合はもっと、できるだけ深く読み解くことのできる教師になりたいと思うようになりました。

■恵光学園の派遣教員を追われた（強制配転に近い＝それにはまたわけがあるのだが）私は、健常児の学校、岐阜市立則武小学校へ転勤しました。そこでは、1年、2年、3年と持ち上がり、ときの校長の温情とでもいうか、4年にはあがらず、もう一度3年を受け持ちました。その頃から岐阜理科サークルに通い始め、科教協に参加します。理科教育にはまわっていったわけです。その3年から4年、5年、6年と学年を持ち上がりました。

■5年生を受け持っていたときから、水泳や縄跳びに全校で取り組んでいきました。5年のときの縄跳びの取り組みは、後ろ二回旋

跳び10回連続とか三回旋跳び10回連続が学級36人中10人現れるというすごさでした。また、6年生でも同じような取り組みをしました。そのときは同じ持ち上がりの学級で、15人の子どもたちが三回旋跳びが10回連続でできるようになっていました。

また、ボクシングの選手が跳ぶような縄跳びの跳び方で、最長で2時間13分間、一度も引っかからなかったという子どもが現れました。このような超人的な取り組みが可能だったのは、私の子供観が“どの子どもできるようになりたいと思っているし、わかるようになりたいと思っているのだ”と心底思えるようになっていたからだと思います。加えて、そのためには子どもたちがそのことに取り組む意味と方法が正しく確実なものになっている必要があるとも思っていました。

★子どもたち相互の、子どもたちと教師との、共同の歩みが緻密で正しければ、すなわち、子どもたちを取り巻く環境や子どもたち同士や教師との人間関係の濃密さと、指導理念と指導法の正しさがあれば、子どもたちは自らの内在的発達の糧（ベクトル）を発揮して、豊かで賢くたくましく育っていくと思えるのです。

■さくら保育園の園長先生、斉藤美智子さんは「指さしができるようになり始めると、まもなく言葉を発し始めます。人間の子どもが言葉を獲得するためには指さしが大切なのですが、多くの子どもたちが豊かに指さしをして活躍することのできる自然の中へは、もはや入っていくことができません。」というような意味のことを話されました。斉藤園長さんたちの保育経験の中で、言葉を獲得しようとしている幼児が、最も豊かに指さしをする場面は自然の中だということです。さくら保育園に隣接して神社があり、神社の石段をまだ歩けない子どもが四つんばいになってがんばってよじ登っていく。子どもたち同士の関わ

りと、いろいろな草や虫たちの振る舞いの中で、指さしが豊かに行われて事実と言葉とが結びついていくのです。それは世界を認識する第一歩です。子どもたちにはそれをする場がもうなくなってしまったというのです。

福島市渡利地区にさくら保育園があります。福島第一原子力発電所の水素爆発によって漏れ出した放射性物質は、福島市渡利地区にも降り注ぎました。渡利地区は福島県下で55番目に高い放射線量のある地区になったのです。園庭と園舎の除染は、かの安西育郎さんの指導のもとに進められ、園庭の土を5 cm削り取り、影響のない土と入れ替えて、子どもたちが遊べる放射線量まで何とか下げることができましたが、隣の神社まではできていませんし、山一つ除染することは不可能に近いでしょう。

子どもたちの発達保障と生活の場の確保のためにできたさくら保育園は、「父母たちがこの地で働いている以上、ここで保育を続ける必要があるのです。」と園長先生は断言されました。つまり、子どもたちは他の場所へ行って暮らすことはできないのです。“子どもたちの生活の場の中には、必ずや発達が保障される環境が確保されねばならない。”この発達保障の大原則が、渡利地区の子どもたちには保障されていないのです。

■昔の子どもだった生源寺は、ゴム動力のスクルーで動く船を何十隻となく造り、広い用水池に走らせに行きました。前後左右4カ

所にブレードを打ち付けた潜水艦なるものも作りました。木で作られた船の上甲板のレベルに吃水線が来るように錘を工夫しました。鉄や鉛という金属に近づいたのは、この船作りを通してでした。

その用水池では小鮒も釣りました。細い竹の延べ竿が30円で、ピンポン球の浮きが入って釣り糸と針、錘のセットが20円でした。近所の3歳年上の男の子は、直径15 cmくらいのセミ捕りの網をお母さんに作ってもらい、夏休みの日がなアブラゼミを何匹も捕まえては死なせていました。時たま捕まえることのできたクマゼミをどんなにか自慢して私に見せたことでしょう。

子どもたちは自然と付き合いながら、人との付き合いの手心を学び取り、自然との付き合い方も学び取っていきました。自然は子どもたちが育つまさにフィールドでした。

★原子力発電所事故は福島第一原子力発電所以外の50カ所の原子力発電所でも起きる可能性は否定できません。もしもまたどこかで事故が起きたら、また指さしのできない場所がふえてしまいます。子どもの発達を自然との関わりで保障する理論と実践を標榜する子どもと自然学会会員の一人として私は、言葉を獲得しようとする幼児に指さしを保障します。ですから、原発再稼働は認められません。そして、一刻も早く原発0を目指します。

★このことを私の所属している大学の学生たちに語りかけ、広めます。(2012.7.15..)

## 第17回福島大会シンポジウムⅠ(1日目)・Ⅱ(2日目)のDVDを頒布します

子どもと自然学会会員のみへの頒布です。一日目、二日目共に後ろカメラからの映像(+音声)と机の上に置いた音声のみの記録、それぞれ二種類4枚セットです。ご希望の方は実費および送料共で¥960です。事務局へ送金ください。(切手可)

郵便振替 口座番号 00110-4-425968 加入者/子どもと自然学会

# 子どもと自然学会

## 第17回研究大会「福島大会」(2012. 6. 2-3)

### シンポジウムⅠ・Ⅱのプログラムと講演要旨

#### ○シンポジウムⅠ (司会・担当 玉生志郎 佐原成典)

日時 6月2日(土) 13時30分～16時30分(180分)

会場 福島大学M3教室

テーマ 「放射能汚染と子どもたち」

- ・ 13:30-14:00 幼児=齊藤美智子さん(さくら保育園園長)
- ・ 14:00-14:30 小学生=古関勝則さん(公立小学校教員)
- ・ 14:30-15:00 中学生=遠藤慎一さん(公立中学校教員)
- <休憩> 10分
- ・ 15:10-15:40 福島大学の学生の取り組み=佐藤由季さん、御代田桜子さん(学生ボランティア)、三浦浩喜さん(福島大学教員)
- ・ 15:40-16:20 討論
- ・ 16:20-16:30 予備 (金谷川駅 16:49 の列車に乗るため、時間厳守)

#### ○シンポジウムⅡ (司会・担当 吉岡秀樹 菅原宏一)

日時 6月3日(日) 9時15分～12時15分(180分)

会場 あづま総合運動公園 あづま球場第3会議室

テーマ 「放射能汚染と市民生活」

- ・ 9:15-9:45 食の分野から=大波昌子さん(さくら南保育園栄養士)
- ・ 9:45-10:15 農の分野から=菅野正寿(すげのせいじ)さん(福島県有機農業ネットワーク代表)
- ・ 10:15-10:45 原発放射能被害と福島の教育課題=佐原成典さん(二本松市元公立小学校)
- <休憩> 10分
- ・ 10:55-11:25 グローバルな視点から福島の教育を考える=三浦浩喜さん(福島大学教員)
- ・ 11:25-12:15 討論

<昼食> 12:15-13:15

#### ○総合討論 (司会・担当 三石初雄 三浦浩喜)

日時 6月3日(日) 13時15分～14時45分(90分)

会場 あづま総合運動公園 あづま球場第3会議室

# 「放射能汚染と子どもたち」(1)

## あれから1年、福島の子育てから

福島市さくら保育園 齋藤美智子

東日本大震災から1年が経つ。放射能災害が始まって1年でもある。先の見えない不安に、いまだに落ち着かない日々を送っている。

昨年4月、「ここに居ていいのか」という究極の問題を投げかけられ、放射能についてよくわからない私たちは、大いに戸惑った。

5月、保育団体主催で開いた市民講座で、放射線防護学者の安齋育郎氏から学ぶことができた。これが縁で、子どもたちの生活のさせ方についてアドバイザー的存在になっていただくこととなる。多種多様な研究者による発言があったが、これまで研究者がどう地域住民とかかわりながら原発の立場で行動してきたのかを問わずに、耳を傾けることはできなかった。安心だと言われても信じられなかったし、不安を煽られ避難を勧められても、ただでさえたいへんな子育て環境を激変させることは、別のリスクを生むことはすぐに予想できた。実際、避難した母子から、園に電話で悩みを伝えてきたケースもあった。残るも避難するも同じほどの困難を抱えていた。

保護者の「ここで子育てしていいのか?」という悲痛な声は、保護者をどう支えるか、そのために職員一人一人が放射能について学び、自らの生活を語り、話し合い、保護者とともに放射能と向き合わざるをえなかった。私たち自身が、線量計を持って園内外を測り、生活圏内を測っていった。見えない放射能の性質が、少しずつ解り、みえてきた。

コトバを覚え出した1歳児が「ハウシャノ

ウ」と言う。「プールにはったらシムヨ」(死ぬよ)と言う3歳児。今年は、外を覗く子どもたちの頭で網戸が多く壊れた。外で泳ぐこいのぼりをうらやみ、「ハウシャノウでおやまがやられていけなくなった」と泣いていた3歳児。「まえはよかった。まいにち、じんじゃにいたり、やまにいったのに。」と言う4歳児。テレビに映った自然の中で遊ぶどこかの子どもたちを見て、「まえに、いったことある。」とつぶやく2歳児。こんな子どもたちのつぶやきに、涙するまわりの大人たち。それでも、子どもたちは、日々成長し、笑い、泣き、怒って、暮らしている。

1月。雪は放射線量を減らす。1歳児が初めて、自分の足で、雪の積もった園庭を歩いた。うれしくて、歩き続ける子どもたち。歩きにくくて座り込むT。そんなTの手をつないで一緒に歩こうとしているH。以前からみたら、たいへんな制約のある暮らしではあるが、なんとかして、子どもたちの生活を豊かにしていきたい。

子どもたちの体を見守る医療体制はすぐに整備されなければならない。子どもたちの未来に不安を与える原発はすぐになくさなければならない。子どもたちを守り、育てるために。

ここで働き、子育てをしている人がいる限り、保育園は存在し続けるものであり、どんな状況においても、子どもの発達には保障されなければならないと考える。

# 「放射能汚染と子どもたち」(2)

公立小学校教員 古関勝則

## 1 すさまじい避難時の状況

- ・3月12日午後3時36分福島原発で爆発。
- ・避難指示が出され、3月12日夕方から13日にかけて、福島市を目指して車の列が続く。勤務先の小学校には、双葉町の皆さんが着の身着のまま避難。
- ・地元の方の炊き出しと避難された方の我慢。冷静さ。1年たっても帰れないことに。
- ・双葉町職員の皆さんの奮闘。
- ・全身をかかえられ、泣きながら大型バスに乗せられるお年寄り。「何も悪いことをしていないのに」
- ・爆発以降、子どもたちは帽子・マスク・手袋着用。外出は控えるように指導。
- ・その後、高い放射能に苦しめられる。福島市・郡山市は特に高く、経済的に余裕のある家庭の子どもは県外へ転校。幼稚園児、小・中・高合わせて、1万人が転出。
- ・窓はあけない。暑いので、エアコンを導入する市町村と扇風機を設置する市町村に。体育館で授業を受けている子どもたちは、限界。7月9日から夏休みに。
- ・川俣町では、6月21日により、小中学生全員が近畿大学原子力研究所よりガラスバッジを貸与され、1日中使用。(3ヶ月測定を4回実施)
- ・校庭などは大量の放射能が残っており、土の除去作業が行われた。プールは使えない。

## 2 学校としての方針

- ・町教委の指示に全て従っている。
  - ・プール使用については、福島県教組・福島県教組福島支部・学校長に使用禁止の申し入れを要請。使用しないことに。
- 結局、国や県の指示を待つのみで、それが絶対とする教育界の弱さが路程。

## 3 放射能や原発についてどのような学習をしているか

- ・川俣町で3月22日に町民を集めて、「放射線とわたしたちの健康講演会」を実施。絶対

に安全という話。しかし1ヶ月もしないうちに山木屋地区の住民に避難指示。

- ・国の基準に翻弄される。

## 4 困難な状況におかれる子どもたちと教職員

(1)困難な状況の子どもたち＝将来が見えない不安

- ・新しい学校での生活 不登校の増加また再転校も多い。
- ・友達との別れ
- ・保護者の収入がなく、住むところも不安だらけ。先が見えないために、子どもにあたる事例も出ている。虐待の増加。
- ・荒れる生活＝非行にはしる子どもも

(2)教職員の苦悩

- ・被災された方の家庭訪問を保護者が拒否。「中流」だと思っていたのにいきなり厳しい状況に。保護者との関係が築けない。
- ・学校が機能しなくなったため、兼務辞令が出される(5月8日)。これにより家族がばらばらになる事例が激増。
- ・しかし、保護者からすれば、担任が途中で代わることの不安から、人事凍結の動きが強まる。PTA会長からの依頼。
- ・兼務先の大変な状況。「今まで体験したことのないことが一気に起きている感じ。」「悪い夢だったら覚めてほしい」(双葉支部緊急集会で)

## 5 否定の中に見える肯定

- (1)人のつながりと「地域」の大切さ
  - (2)地域で励まし合う姿が
  - (3)学校にも時間がゆっくりと流れた。→学校のあるべき姿が見えた。
- ・子どもの話を丁寧に聞くこと
  - ・忙しくなければ子どもに優しくできること
- (4)しっかりとした学びを

※ 放射線教育については、当日報告させて頂きます。

## 放射能汚染と子どもたち（3）

### ――中学生に起きたこと、起こっていること そして未来を拓くために――

福島県相馬市立中村第一中学校 遠藤慎一

- 1 3.11後に子どもたちに起こったこと、起こっていること  
?原発事故による被害の甚大さ・深刻さ?
  - バラバラにされた友だち、学校の仲間
  - 放射能汚染で遅れての新年度スタート。or 汚染された中でも開かれてしまった学校。
  - 学校再開の悲惨な実態
    - ・ スクールバスにさせられての登下校
    - ・ 突然剥がされて行く先生たち
    - ・ 支援物資にたよっての学校給食
    - ・ 運動が十分にできない、運動部活動ができないことによる苛立ち
    - ・ 間借り教室から、次は仮設校舎への引っ越しと
  - 身近な高校がサテライト校に
  
- 2 文科省や県教委、地教委の姿勢
  - (1) 大規模な被災・被害が生じたときの教職員配置は該当（都道府）県任せでいいのかが問われる
  - (2) 「学力向上が復興の要」とする県教委・地教委の姿勢とショックドクトリン
  - (3) 放射線・放射能についての学習?文科省「副読本」がいち早く出された?
  
- 3 あらためて、学校のあり方、教育のあり方を問い直す必要性
  
- 4 住民運動の中で、子どもの成長保障について考え合う



「放射能汚染と子どもたち」(4)子ども支援ボランティアの取り組みと福島の子ども達  
 佐藤由季（福島大学大学院人間発達文化研究科1年）御代田桜子（福島大学  
 人間発達文化学類4年）三浦浩喜（福島大学人間発達文化学類教員）

1. 子ども支援ボランティア活動

人間発達文化学類は、東日本大震災発災直後より教員による避難所支援活動等を行い、4月下旬より、学生・教員による子ども支援ボランティア活動を展開し、現在も継続中である。概要は以下の通りである。

期	期間	主な活動場所	支援内容	活動実績
第Ⅰ期 (学類単独)	2011年4月 ～8月	福島市と郡山市 の避難所	主として小学生の学習支援活動や遊び支援活動、自然体験学校、移動教室ボランティア	登録学生：2～4年生、約150名、 参加学生：延べ300名、約90回の活動、子ども：延べ700人
第Ⅱ期 (うつくしまふくしま未来支援センター、NPOとの連携)	2011年9月 ～2012年3月	毎週土曜日午後、6箇所の仮設住宅、福島大学キャンパス	仮設住宅における学習支援活動や遊び支援活動 クリスマスパーティーや「日曜日子どもキャンパス」、わくわくステップアップキャンプ、移動教室ボランティア	登録学生：1～3年生、160名 参加学生：延べ500名、90回の活動 子ども：延べ1100名
第Ⅲ期 (同上)	2012年4月 ～	毎週土曜日午後、6箇所の仮設住宅、福島大学キャンパス	主として小学生の学習支援活動や遊び支援活動、自然体験学校、移動教室ボランティア	登録学生：1～4年生、約120名 参加学生：延べ100名、6回の活動 子ども：延べ150名 ※5月20日時点

2. 避難する子どもたち

(1) 健気がんばる元気な子どもたち、しかし——避難生活の「闇」

- ① 友だち、親族の離散、様々な支援者との出会い——断片化する人間関係
- ② 度重なる転校——履修の「抜け落ち」の可能性、8割の学校が「計画通りの実施困難」
- ③ 児童生徒の他地域への流出（18000人）、流動化——教員の流動化、深刻な教育崩壊
- ④ 希望校への進学、部活動のあきらめ、サテライト校——大きな喪失感
- ⑤ 避難生活への適応——無軌道化、無気力化——ゲーム漬け
- ⑥ 長期にわたる運動不足から反射神経、抵抗力の低下——怪我、病気、入院
- ⑦ 「結婚できないんでしょ、子ども産めないんでしょ」——絶望、未来の不安
- ⑧ 自然や社会に対する根本的な信頼関係の喪失

(2) 学校——平常時モードと緊急モードの混在。「不安定」の恒常化

- ① 教員の人手不足（放射能対応、カリキュラム対応、PTA対応、就学事務対応、……）
- ② 全体的な教育復興計画は？

(3) 地域——子どもたちを問題へと向かわせる要因の増大、問題行動を押しとどめるコミュニティの力が減退、子どもを見守る大人のまなざしは？  
 （文責：三浦浩喜）

## 「放射能汚染と市民生活」(1) 食の分野から

大波昌子 (さくらみなみ保育園栄養士)

### ■ はじめに

さくらみなみ保育園について

2006年6月開園 60人 緑豊かな平石の地

子どもたちが人間らしく豊かに育つための発達の保障をする保育をめざし、そして給食はその保育の大事な柱として位置づけられています。

「食はいのち」をモットーに給食づくりをしている

### ■ 食事づくりで大事にしていること

1. 発達をふまえて〔摂食機能・歯・運動機能など〕
2. 食材へのこだわり〔安全・地産地消〕
3. おいしいものを作る〔味は学習によって育つ・手作り重視〕
4. 楽しい雰囲気食べよう〔環境・共感・マナー〕
5. 日本の食文化・郷土食を大事に〔主食は米・一汁二菜・箸・陶食器〕
6. 食の営みを学ぶ〔栽培・クッキング・給食当番〕
7. 一人ひとりの食事にも対応〔離乳食・アレルギー除去食に配慮〕
8. 職員・父母・地域とともに食生活を考える

### ■ 2011年3月11日放射能汚染により失われたこと、変化したこと

1. 自然とふれあう生活 毎日の散歩

例 4月のよもぎつみして食べるよもぎ団子 いなごの佃煮  
畑で焼き芋 城山への遠足とお弁当

2. 田畑づくり 田植え稲刈り 野菜作り(畑で食べる野菜の味) ぶどうの木の下で
  3. 地域とのつながり 田んぼや畑作りの世話をしてくれた人達
  4. 地産地消 県産の米・野菜・果物・牛乳などなどが県外産に
- ※とにかく食品の放射能汚染から安全をまもるにはどうしたらいいのか？！
5. 行事のたびに思案し悩む日々

ちまき 流しそうめん 収穫祭

6. 父母の思い 「食品の放射能汚染を気にしている」9割

給食での取り組みを知らせる 食品のモニタリング結果を提示

### ■ 給食で大事にしてきたこと

1. できるだけ汚染の少ない食品を選ぶ
2. 食品の放射能測定検査をして安全を確認する
3. 免疫力を高める献立・食材を
4. 食べ物に関心をもたせたり、ふれる機会を増やすとりくみ

### ■ これから

1. すべての給食室に食品の放射能測定機を、【市場に流通する食品も】
2. 徹底的に地区の除染を 子ども達が安心して遊べる暮らせる自然・くらしを

## 「放射能汚染と市民生活」(2) 有機農業が創る、持続可能な新しい時代へ

福島県有機農業ネットワーク代表 菅野正寿

### ① 地域資源循環の農業と農法・その再生の大切さ

- ことごとく汚染された里山の地域資源(樹林・落葉・堆肥・わら・もみがら・米ぬか・炭・菜種粕・漁粕・・・) その資源を活用した土づくりと有機農業に復興の光がみえた。
- 地力の高い土壌ほど放射性物質(セシウム)の固定化と農産物への移行が低減  
粘土質+腐植の複合体+ 微生物資材の有機的な力(土のもつ懐の深さ)
- 農家・住民と大学・研究者の共同調査の大切さ  
その土地の地形も土壌も知っている農民的技術に科学の視点で検証
- 山林から流入する、用水からの汚染をどう低減するかが今年の課題

### ② 農家の自給・地域自給による地域の再生

- しっかり測定をして農家自給があつて消費者の台所があること。  
(これなら孫にたべさせられる、お年寄りのやりがい、生きがい)
- その地域の旬の日本型食生活で地産地消・学校給食こそ復興への道  
輸入農産物と化学物質で免疫力が低下した。有機農業で生命力ある食べもの
- 再生可能エネルギーを地域分散型で地域自給  
木材・炭・小水力発電・バイオ燃料・風力、太陽光発電

### ③ 共に持続可能な社会をつくる共農・提携関係づくり

- 放射能により分断された提携(意識の高い消費者ほど)
- 林業・農業・漁業(第1次産業)を守ることが食と健康と環境を守ること
- 持続可能な社会は第1次産業がつくるという共農関係  
(顔の見える都市から農村への新しい関係づくりの構築)

### ④ 地場産業を育て、雇用をつくる地域づくり(地域住民による復興)

- 原子力村・大企業に対峙した住民主体の復興を
- 地元の業者・企業と連携した地場産業と雇用を育てる
- 有機農業がつくる6次化産業へ(福島の資源を福島で加工)

### ⑤ いのちを育むネットワークづくり(地域コミュニティの再生)

- お年寄りも婦人も新規就農者も共につくる地域営農  
(ひとりぼっちにならないコミュニティづくり)
- 有機農業が繋ぐ医療・教育・福祉・文化のネットワーク
- グローバル化の競争社会からローカルな人間復興の農ある社会へ

## 「放射能汚染と市民生活」(3) 放射能被害と福島教育課題

福島 二本松 佐原成典

1. 原発の爆発は、最大の安全対策をとってこなかったから(人災)
  - 原発はあらゆる放射性物質をつくりだす製造器である。
  - 核燃料は冷却し続けなければ崩壊熱でとろけてしまう。炉をとろかしてしまう。
  - 冷却用の全電源喪失の対策をとっていなかった。(4つも準備したからと)
  - 経済性を優先し、わざわざ地面を下げて建設された。津波に弱い。
  - 都市化しない場所が選ばれた。(危険性の認識)
2. 福島には事故情報は連絡されなかった。
  - 電気、通信、携帯電話は切断状態。オフサイトセンターは機能できず。
  - 爆発は、警察無線で伝わる。警察の指示で避難。どこへ行くかまるで分からず避難。
  - 爆発での放射能の行方は伝えられず。皆、外で食料や水を確保しようと活動していた。このとき多量のヨウ素を浴びた。その後セシウムを浴びた。90万テラベクレル。
  - 現在、セシウムを中心に県土は放射性物質に汚染されている。帰還困難地域ができていく。土壌汚染は近県にも、大洋にも広がっている。
3. 生活と健康、学習を巡る運動が起きた。
  - 学習会の組織。まず、知ること。見えないものは測定をする。事故以前にもどせ。
  - 外出は控え、外出時は肌の露出はさげ、マスクをする。森には行かない。
  - 校庭校地の地面をはぎ取る。通学路、住宅地の地面をはぎ取る。
  - 学習環境を整える。教室にはエアコンを。室内で運動できる施設を。
  - 18才以下の医療費は無料(福島県)。子どもと妊婦から内部被曝検査を受けている。
  - 子どもと女性の積算線量の把握。県民の健康調査。
  - 食品の放射線量を検査している。(県、市町村、JA、給食調理場、中には小・中学校でも)はかって「食べる」
4. それでも残る教育上の課題
  - 甲状腺の被害はこれから起こるかも・・・という不安。
  - 止まらない子どもの県外避難。(17千人以上)
  - ガン以外の病気に、放射線が関係しているかも・・・
  - 原発による失業が保護者、子どもに暗い影を落としている。
  - 元の地域に帰れない、学校は休校中。友だちはバラバラ。
  - 高校は深刻。仮設住宅が離れていて高校生は寮生活も。サテライト校制度は遠距離。
  - 県教委は原発事故後も「学力向上」に取り組むようと指示を出している。この感覚。
  - 文科省と県教委は、放射線は怖くないことを内容とした教育をやるよう指示。
5. 放射線教育は原発事故を前提にして行うべき(文科省の副読本に対して)
  - 人工の放射線は集められていて危険なものである。「薬物と同じ扱い」
  - 放射線の実態を知る。見えないものは見えるようにする。ホットスポットの存在。
  - 体への影響を知る。ガンだけじゃない、一般の病気を誘発しないか?放射線は浴びないに越したことはない。3, 8 $\mu$ sv(年間20mSv)まで大丈夫とは文科省。
  - 原発は環境を汚染するもの。原発廃棄物の処理法は未確立。廃棄場所もない。
  - 電力は、無駄をなくし、太陽エネルギー由来のものに。省エネルギー産業への誘導
  - 医学治療用など放射線の利用は制御可能などところから。
  - 放射線・放射性物質の学習は原子の学習をする中学校理科で。

## 「放射能汚染と市民生活」(4) グローバルな視点から福島を考える

三浦浩喜（福島大学人間発達文化学類教員）

### 1. OECD東北スクール

2011年3月11日東日本大震災が発生し、その4月にOECD（経済協力開発機構）のアンヘル・グリア事務総長が来日し、文部科学大臣に復興支援の協力を約束した。OECD東北スクールはこの約束が実現したものであり、OECD、文部科学省、外務省、福島大学、関係自治体とで実施する、3年間にわたる地域復興の担い手育成プログラムである。岩手・宮城・福島の被災3県の中学生・高校生約100名を、一箇所に集めて春と夏に実施する一週間程度の集中スクールと、各地域ごとに実施するウィークエンドスクールを積み重ね、2014年にパリで東北を世界にアピールするイベントを実施するという壮大なプロジェクトである。既に多くの政治・経済・文化の各界の著名人が支援を表明しており、参加した生徒たちが発案したいくつかのプロジェクトは、日仏の政府間で合意され、実現に向けて動き出している。

OECD東北スクールの特徴を、OECD教育局の田熊美穂氏は次のように整理している。

- ① 自助努力の継続性 —— 現地の実態に即しつつ、開かれた未来を見据えた、継続的な自助努力・自立・社会参画の促進
- ② 理論・裏付け —— PISA調査の枠組みとなった OECD コンピテンシー に基づくカリキュラムの枠組み設定
- ③ 先進教育研究・事例紹介 —— 「プロジェクト学習法」や「学校とコミュニティの協力」など、OECD研究で効果的と報告された先進事例や震災体験国の教育復興事例の紹介
- ④ 学際的アプローチ —— 他分野に渡る局をもつOECDの学際的なアプローチにより、教育セクターと復興産業・新産業など、他のセクターと交わる分野で、問題解決型思考の機会を提供
- ⑤ イニシアティブからシステムへ —— 既存の創造的復興に向けた多くのイニシアティブが、「一過性」「断片的」にならないよう、本フレームワークを利用し、同じ目的・方向性を持つ個々の取り組みをスケールアップ。既存の教育システムに新しい価値観が根付くよう働きかけ
- ⑥ 個と個のつながり —— 「組織と組織のつながり」を超え、フラットでオープンな「個と個のつながり」を働きかけ、国内外で相互理解を高め、ソーシャルキャピタルを共有
- ⑦ 国際性 —— 東北と世界をつなぐ発想を引き出す・発信する機会を提供

### 2. スプリングスクール in いわき

3月26日から30日にかけて福島県いわき海浜自然の家において、第1回OECD東北スクール・スプリングスクール in いわきが開催された。集まってきた生徒は80名で、岩手県の釜石市、大槌町、宮城県の気仙沼市、南三陸町、女川町、福島県のいわき市、伊達市、相馬市、大熊町などの中学生と高校生達だった。いずれも自分たちの地域の復興を真剣に考えている若者達であり、かつ、たんに地域復興に留まらず、国際的な視野を得てこれまでとは異なる地域のあり方を模索しようとする雰囲気も当初から伝わってきた。ワークショップは、池上彰氏（フリージャーナリスト）、三谷宏治（金沢工業大学）氏、三浦（福島大学）、Edmund Lim氏（シンガポール・小学校校長）、磯崎道佳氏（造形作家）、Gad Weil氏（国際的イベントプロデューサー）、内田和成氏（早稲田大学ビジネススクール）らによって展開され、いずれのワークショップも参加した生徒たちに新鮮に受け止められた。最終日、各グループから2014年にパリで発表するイベントの素案が発表され、参加した生徒たちに修了証書が手渡された。

# 子どもと自然学会 2011年度(第3期3年目=発足9年目)活動報告

2012.6.3.第17回福島大会総会にて承認 事務局長 生源寺孝浩

## 1. 研究大会の実施

### 11. 第15回研究大会「名古屋大会」

大会テーマ：①都市の自然環境での子どもたちの学びと育ちを考える

②大震災と津波、原発から学びを考える

開催期日 2011年5月21日(土)22日(日)

開催会場：藤前干潟/名城大学名駅サテライト

1日目：フィールドワーク(藤前干潟)/第6回全国学生交流集会/懇親会

2日目：シンポジウム/総会

※大会準備の過程で3・11が起こり、急遽、大会テーマ②が設定された。

### 12. 第16回研究大会「神戸大会」

大会テーマ：海・山・町と人との関係を問い直す—子どもたちに伝え残したいもの—

開催期日 2011年11月26日(土)27日(日)

開催会場：甲南女子大学

1日目：フィールドワーク/講演/シンポジウム/第7回全国学生交流集会/懇親会

2日目：一般発表Ⅰ・Ⅱ/ポスターセッション

参加者：会員23人 非会員6人 学生56人 参加者総数85人

※ポスターセッションを初めて試みた。学生のポスター発表に関わって評価の仕方が問題になった。

## 2. 研究委員会からの報告

生物教育研究委員会からの報告と計画

### 2011年度活動報告

生物教育研究委員会は子どもと自然学会発足時にスタートし、ほぼ月1回の研究会をもち、研究を進めてきた。この間の研究成果をまとめ、研究速報として発行し、ホームページ上に公開することとした。

2011年度は次の内容を発行・公開した。

「人間は核時代をどう生きるか(第10学年)」「大きな動物と小さな動物(第5学年)」「人間性の起原(第8学年)」「人権の生物学的基礎(11学年)」

### 2012年度活動計画

引き続き研究を進め、順次、研究速報を作成・公開していく。

## 3. 子どもと自然学会誌の発行

12号(第6巻1号)2011年4月30日 発行(2010年度分)

13号(第7巻1号)2012年1月31日 発行(2011年度分)

1)学会誌の年度内発行を目指す。

2)編集委員会の役割を再考する。

3)将来的には電子出版を検討する。

※年一回の発行は着実に続けられている。掲載論文数の増加を追求したい。

#### 4. 子どもと自然学会通信の発行

39号から44号まで6号を発行した。(総ページ数136頁)

#### 5. 第4期理事会選挙

第4期子どもと自然学会役員選挙は、選挙管理委員に今城善夫さんをお願いして立候補を募り、会長1名、副会長4名、理事20名を選出した。

### 子どもと自然学会 2012年度活動方針

#### 6. 子どもと自然学会役員会 各担当を以下のようにした

事情のある一人をのぞいて、役員は一人二役を受け持つこととした。以下その役割分担である。

#### 第4期 子どもと自然学会理事会役員会 組織表

(◎どちらかというに関西 □どちらかというに関東 ◆超遠方)

会長 ◎稻生 勝 / 副会長 ◎石渡正志 ◆大森享 ◎三上周治 □吉岡 秀樹

<b>【研究推進】</b> 副会長 ◎石渡正志 □渡辺 隆一 ◆竹下 清一郎 □安藤 元一 □青木 正博 □郡司 晴元 □安東 久幸 □岡本 清 ◎小川 嘉憲 □中谷 治代 ◎菊本 格	<b>【学会誌】</b> 副会長 ◆大森享 ◎岸本 清明 □玉生 志郎 ◎安江 定夫 □安東 久幸 □杉山 栄一 □渡辺 隆一 □郡司 晴元
<b>【集会等】</b> 副会長 □吉岡秀樹 □新田 博 □青木 正博 □岡本 清 □玉生 志郎 ◎生源寺千加子 □新沼 溪 ◎生源寺 孝浩 □太田 隆司*	<b>【学生】</b> 副会長 ◆大森享 副会長 ◎石渡正志 ◆竹下 清一郎 副会長 ◎三上周治 □安藤 元一 ◎岸本 清明 □新沼 溪 ◎菊本 格 □杉山 栄一 ◎玉井 裕和 ◎小川 嘉憲

#### 【事務局】3+5人

「子どもと自然学会の10年 これまでとこれから」を下の3人を中心にして、会員の中から何人かの委員を委嘱し、集団で活動していく。事務局に位置づける。

副会長 □吉岡秀樹 □中谷 治代 □新田 博

事務局の仕事は以下の5人で行う。

副会長 ◎三上周治 (HP補佐・学会通信) ◎安江 定夫 (HP担当) ◎生源寺千加子 (会計担当)  
◎生源寺 孝浩 (事務局長・学会通信担当) ◎玉井裕和 (学会通信・HP担当補佐)

## 7. 福島大会参加者で文集を作る

次のような提案が岩田 好宏さんからあり、皆さんで協議した結果、作るようになった。  
提案内容は以下のようです。

1. 福島大会に参加した人全員が
2. 子どもと自然学会会員全員に対して
3. 提案する。

全員というのは、強制するものではありませんが、お一人お一人が、この大会に参加して感じたこと、思ったこと、知ったこと、考えたことを書いていただき、それを合わせたものを全会員に伝えてほしいという、参加できないものの願です。

誰かが一つの文章の形で起草して、総会で同意を得て、決めるというのではなく、いわば、参加者全員の参加しての成果を思いの形で、会員全部に伝えていただきたいということです。

参加した人とは、子どもと自然学会の会員だけでなく、会員以外の方、福島県の人をふくめてという意味の全員です。

タイトルを【文集原稿】としてワード・一太郎で添付して送ってください。

E-mail の送り先は：shogenji@m5.kcn.ne.jp です。

郵便は 〒611-0002 宇治市木幡平尾 27-480 です。

締め切りは2012年8月25日です。

別紙：

2011年度会計 決算報告並びに監査報告

2012年度会計 予算案提案

## 8. 子どもと自然学会ながの大会

子どもと自然学会第18回ながの大会を2012年11月24日・25日に行う。

詳細は別途知らせる。

19回大会の場所と日程を決定する。

## 9. 子どもと自然学会誌の発行

子どもと自然学会誌第14号の発行 発行予定 2012年11月24日

【研究推進】担当と【学会誌】担当が協議して、学会誌の内容を豊かにしていく。研究者だけではなく、教育実践の記録なども掲載していくようにする。また、年間二号を発行していけるように努力する。

## 10. 学生交流について

学生交流集会を発展させて学生だけの全国集会を持てるように考えていく。全国教育系学生交流集会のようなものを構想する。



子どもと自然学会 2011年度 決算報告

2012.3.31.

収入の部

項目	予算	決算	差し引き	備考
繰り越し	361,664	361,664	0	
会費	260,500	320,000	59,500	'07-1人, '08-2人, '09-10人, '10-24人, '11-103 (一般93人, 学生10人)
学会誌掲載料	20,000	35,200	15,200	12号=18,400円, 13号=16,800円
学会誌販売	20,000	1,000	▲ 19,000	1冊
雑収入	5,000	20,516	15,516	寄付=10,500円, 利息=16円, ※その他=10,000円【口頭で説明】
合計	667,164	738,380	71,216	

預り金= 162,000円 (別会計 繰越金には含まれない)

内訳= 2012年度分 29人: 一般28人 70,000円+学生1人: 1,000円

2013年度以降 3人: 83,000円

2011年度以前 8,000円

支出の部

項目	予算	決算	差し引き	備考
事務費	80,000	2,790	77,210	用紙、宛名シール、コピー代など。
通信費	80,000	80,480	▲ 480	通信39号から44号 送料など。
学会誌印刷製本費	280,000	251,948	28,052	学会誌 12号=100,223円 (送料を含む), 13号=151,725円
学会誌送料	48,000	18,180	29,820	12号, 13号分 (12号の送料が印刷代に含まれたため)
研究大会補助費	60,000	92,376	▲ 32,376	名古屋大会、神戸大会分
備品費	0	0	0	
会費	10,000	5,790	4,210	理事會会費
会費交通費補助	30,000	0	30,000	事務局会費不成立だったため。
予備費	26,024	15,210	10,814	研究大会物資送料 (5,210円) ※その他=10,000円【口頭で説明】
合計	614,024	466,774	147,250	

差し引き 738,380円 - 466,774円 = 271,606円

271,606円は2012年度へ繰り越します。

《監査報告》

子どもと自然学会 2012年度 予算

2012.6.3.

収入の部

項目	予算	決算	差し引き	備考
繰り越し	271,606			
会費	260,500			2,500円×100人=250,000円, 1,000×10=10,000, 500×1=500
学会誌掲載料	20,000			投稿分
学会誌販売	20,000			20冊
雑収入	5,000			
小計	305,500			
合計	577,106			

支出の部

項目	予算	決算	差し引き	備考
事務費	80,000			通信用封筒 (40,000円は3年分)、用紙、宛名シール、コピー代など。
通信費	80,000			通信45号から50号 送料 はがき、など。
学会誌印刷製本費	160,000			学会誌 14号 編集・印刷・製本費 (査読送料等を含む)
学会誌送料	25,600			14号送料 (160冊×160円)
研究大会補助費	80,000			福島大会、長野大会 分
備品費	0			
会費	10,000			会費など。
会費交通費補助	10,000			事務局会費、監査交通費補助。
研究委員会補助費	10,000			研究委員会活動費補助。
小計	455,600			
予備費	121,506			
合計	577,106			

※研究委員会補助費を新設した。/ 学生が卒業後住所が不明になることが多い。学生が卒業後に一般会員として継続することが大切。

# 第18回ながの大会のご案内

長野は四方を山に囲まれ、日本一の千曲川が盆地の中央を流れています。豊かな自然はリンゴや桃など様々な農産物を生み、キノコ栽培やカンテンなど地域ごとに特色ある産業をそだててきました。その自然豊かな信州も自然離れなど子どもだけに限らない多くの課題をかかえています。それでも地域の自然と人々とを再び豊かに結び付けようと頑張っている人たちがたくさんいます。寒い季節になりますが、そんな方々を交えて、信州の自然の中でこれからの世界を創るための施設や活動のありかたを熱く語り合しましょう。

## テーマ「どうする 自然離れ（仮）」

信州の豊かな自然が見捨てられてゆく現状とその豊かな自然を子どもたちの育ちに活用している事例など人と自然とを結ぶ活動の実際を見ていただきながら、各地の事例からも学びつつ、これからの子どもと自然のありようを考え、討論します。

**11月24日（土）** 午後から一般発表 ポスターセッションなど  
懇親会、学生交流集会など 【宿泊は検討中です】

**11月25日（日）** フィールドワーク（飯縄高原）シンポジウム 総合討論  
15時解散予定

見所：主会場を長野市の裏山である飯縄高原に設定しました。長野駅から30分で上がれる高原はかつては豊かな自然と開拓の農地との混生地でありましたが、現在では長野市のベッドタウンともなって新たな開発の波にあらわれています。過疎の反面での宅地化など、日本の自然の1断面をみることができます。一方でこの高原には子どもの森幼稚園があります。ここは1982年に野外保育を求めて開設された森の幼稚園運動のさがけとなる施設です。モットーは「長靴をはいた天使たち」、深い雪の冬でも長靴で元気に野外をかけまわる子どもたちをみると自然と子どもの深い関係を理屈抜きに納得することができます。そして、そんな幼児や小中学生の野外活動のためのネイチャーセンターが森の中に設置されています。センターには子どもたちが自由に活躍できる広い野外施設が併設されて年々その活動の成果が施設の充実にもつながっています。高原にはまた、長野県環境保全研究所も森の中にあります。県の自然や環境調査の拠点としてだけでなく教育部門も普及活動にも力を入れています。

また、長野県では大半の小中学校が学校登山を恒例行事にしています。登山もまた信州の自然と人との関係の大きな特徴です。その現状と課題も紹介できたらと考えています。

このように、多彩な信州の自然の現状とそこでの様々な活動事例を紹介しようと考えています。ぜひご参加ください。

参加・一般発表案内は次号に予定しています。

問合せ：渡辺隆一（信州大学教育学部） [wataryu@shinshu-u.ac.jp](mailto:wataryu@shinshu-u.ac.jp) まで